＊講演

保育の原点をさぐる

三宅　廉

（註　これは昭和五八年九月六日、奈良県文化会館に於て開催された日本保育協会主催全国保母養成セミナーの特別講演として口述したものの要旨である。）

私のような小児科医師が、現場で苦労している皆さんの前に立つ資格が問われると思うが、皆さんとの共通点は毎日こどもと取組んでいることで、私は約五十五年の間数多くの母と子に接して来た。何故私がこどもが好きだったかというと、その発育の神秘に心が惹かれ、エネルギーのかたまりで、しかも未完成で、未来に向って可能性に満ちていることに興味をもっていたからだ。この点は皆さんと共通している接点だと思う。

私の持論は小児医学は小児教育学だということであり、従って私は臨床医学の傍ら小児保育学を、ことにその思想を勉強して来た。そのため今迄に京阪神にある幼稚園々児の母親達に教育講演を度々行って来た。一方保育学科をもつ大学の講座を担当、京都の華頂短大に二五年間、神戸の頌栄短大に三十年間、小児科医の立場から保育学を講義して来た。そして一人でも多くよき保育者

を養成したいというのが私の夢であった。

そこへ幸いよき機会に恵まれて一昨年フレーベル研究の第一人者荘司雅子先生を団長とする欧州幼児教育視察団に加えられ、近代保育の源泉を探ることになり、ヨーロッパに於ける保育の実情と、その基礎をなした近代保育学の先輩達の活躍の跡を自分の眼でたしかめたこと、更に又昨年頌栄短大の創始者ハウ先生の母教会であるシカゴのベタニーユニオン教会に学生を引率して出かけ、私の長年に亘る保育学に対する考えをまとめることが出来たので、これを披露し聊かでも皆さんの今後の御活躍に御参考になればと思い、玆に立った次第である。

今日の主題は保育を二つの方面から話をして、その原点を探ってみることで、先ず初めは保育を年令的、医学的或は教育学的に考えることから始めてみたい。

私は昭和三年に大学を出たが五年たってから生れ立てのこども（之を新生児とよぶ）に興味をもち始めた。当時、新生児は婦人科と小児科の間に挾まれ、所謂闇の谷間にあって医学的に不明瞭なことが多く、死亡率も高く、死亡すると一様に先天性生活力薄弱児と診断され、幸い生命をとりとめても心身障害者となることが多く、甚だ未開発の時代であった。

そこで私は大学を辞し小児科と産科と協力し合う病院（今のパルモア病院）を建設し日本で最初の周産期病院をつくったのである。その後今までに私は二万人に及ぶ赤ん坊の出産に立会い人間の最も大きな危機を見届け、その後育ちゆく姿を追跡、十五才を迎えたとき同籃記念会なるものを開いて一堂に招集し、両親につれられた青年と再会、劇的な握手をし激動することを私のライフワークとして来た。

以上の経験から知り得たことは、保育の原点は胎児、更に新生児であるということである。即ち人間形成の原点、換言すれば人づくりの第一歩は直径〇、一三耗の受精卵であり、このとき既に人としての設計図が出来上っているのである。このいのちのもとは二万の遺伝子をもつＤＮＡであり、更にＲＮＡを介して細胞内にリボゾームを作る。その後、六週間で脳、肺、肝、腎、眼、耳、

が、十週間で心臓が完成し、四ヵ月では自我が芽生え、五ヵ月では触覚、味覚、六ヵ月では聴覚が働き出し母と子が互いに信号を送り合うことが認められ、母子ともに、体液、血液のバランスを保ち同じリズムで呼応し合って居ることが超音波などによる研究で科学的にうらづけされたのである。こうなると、紀元前四百年のプラトンによる「こどもの教育は胎内から」ということ、フレーベルによる「教育は受胎告知のときから」ということが立証され、レオナルド・ダビンチが「胎内では一つの魂が母子という二つの身体を支配している」といったことも頷(ウナズ)けるし、江戸時代の稲生医師の「母と子は一気であり、母の心のさまを子の心にうつし、母の身の働きを子の身にうつす。母の心よこしまなく、すなおなれば、生れる子の心も正しい」といったことは真理で、胎児は決して欺くことが出来ない。胎児の最も尊いことは無限の多様性の中に夫々異った個性をもっていることで、その独自性の故に全くかけがえのないことを示している。これが脳髄に於ける神経単位（ニューロン）の特異性であり、神経細胞から出る樹枝状突起による配線工事こそ、ローレンツの唱えた尊い「刷り込み」現象で、之が胎生六ヵ月から初まる消え難き学習であるとすれば人生の方向づけはこゝでおおよそ決められてしまう。

こうして始められた教育は母と子のきずなに基く個性の伸展であるといえる。更に分り易くいえば、母と子の基本的信頼に根ざす安定性と持続性、これを基盤とした家庭の中での自由、個性、自然教育である。

しかし現代の教育は、個性を無視し、形式的、規定的、画一的、命令的、干渉的であり、目に見える知識、技術の優先が目につくのである。ここで一度、保育の原点に立戻って出直す必要があるのではなかろうかと思う。

そこで私は第二の問題に移り近代保育学の先覚者の精神に立ち返って、教育の原点を考えてみたいと思う。それを駆り立てて呉れたのは、このたびの欧州に於ける幼児教育誕生ゆかりの地の訪問であった。

先ず保育者の先覚者とは誰か。それはいわずもがな、

スイス、ジュネーブのルソー。チューリッヒのペスタロッチ。東ドイツ、ウアイスバッハのフレーベルである。彼らは近代幼児教育の基礎を作りヨーロッパの夢を醒したのであるが、それでは三人の現われる以前のヨーロッパはどうだったか、それはこどもを小型の大人と考えて居り、いわばこどもの中に大人を求めていたともいえよう。

ルソーの代表作「エミール」（一七六二年）の出た頃のフランスの教育状況はこの著作の中で手にとるように分る。誠に目にあまるものがあったようで、専ら伝統的であり自然に反し強制的であり、服従、命令、干渉、束縛を旨とし、こどもの本質即ち発育を理解せずこれを無視した所にルソーが目をつけ革新的な新教育を唱え、これをエミールの中で発表した、そのあとゲーテが言ったように「ルソーと共に新時代が始まった」のであった。

かくしてルソーにより新幼児教育の火の手があげられそのエミールをチューリッヒの大学生時代に読んだペスタロッチがその思想を引きつぎ、更にフレーベルがペスタロッチの新教育をイベルドンで見学し、ドイツに帰ってキンデルガルテンの創設をしたのである。この思想が日本にも引つがれ、ペスタロッチは長田、小原へ、フレーベルはハウ、石原、倉橋、荘司と引きつがれていった。

今述べた人達の考えた幼児教育の原点は、先ずこども一人一人にかくれたいのちのあること、このいのちは神から委托されたもの、換言すればこどもを神の子と考える。即ちこどもは生れながらにして神性をもついのちであることを口を揃えて強調したのである。従って先ずこどものいのちは尊重すべきものであり、これを育くみ導き最高に生かすことが保育の目的である。これが私共大人の教育者の使命であるとする。たしかに私達は、アフリカの聖者アルベルト・シュワイツアーのいったように、「生きようとするいのちにとりかこまれた、生きようとするいのち」なのだ。

何といってもこの世の文化は生命の畏敬から始まる。

そうすると次に考えられることは、こども一人一人に尊い個性が與えられているということで、これをルソーが強調し、ペスタロッチに受けつがれた。彼はその個性を隠れた生命とよび、且つ神性とよんだ。その夫々のもつ尊い個性を未知の鉱脈のように発見し、これを自由に、自然にのばすことをルソーはエミールで主張した。これがゲーテ、カント、トルストイにまで大きな影響を與えている。このたび、旅行で知ったことだが、トルストイが十五才の時に既にルソーに傾倒し全書を読破して居るのに驚いた。彼の出生地ヤスヤーナ、ボリヤーナを訪ねて深い感慨に耽った次第である。

次にかの三人の先覚者が口を揃えて強調したことは、広い意味で、こどもを取り巻く環境の重要性である。その第一は自然である。先ずルソーは自然の本質は神であり、自然という書物から神を知ることが出来、この自然こそ私共の教師だということである。そのことにはペスタロッチも同じであり。フレーベルは自然に親しむことこそ幼児教育の第一歩であると言った。そこから心の豊かさ、視野の広さ、美しい情操が育ち、惹いては平和を愛する心が育つ、フレーベル以上に花と音楽を尊重したのは、神戸の頌栄でフレーベリズムを紹介したハウ女史で、彼女が神戸で活躍中、折しも日本に教育勅語が発布されたのであったが、これを日本のこどもに教えることが、如何におさなごの平和な心を損うかを憂えたという。

このたびノーベル賞を得た京大の福井教授の感想を聞いても、彼はこのたびの研究の端緒は、たゞ自然を愛しファーブルの昆虫記に心惹かれたことであったという。私共の耳を傾けるべきことだと思う。

次に大切なことは家庭環境である。その中でも最も大きな影響を與えるのは勿論母親で、最初の教育者である。それを力説したのはペスタロッチとフレーベルであった。前者は実母のスザンナと手伝のバベリから受けた印象がつよく、フレーベルは生後十ヵ月で敬虔な母フレデリカを失っているが実によき母であったことは兄弟愛の美しかったことから察せられ、妊娠中は乳児期に於け

る母による愛情の刷り込みが素晴らしかったことを物語り、幼いもの程家庭環境の影響を受けることの大きいことが、ミドナプールのカマラ、アマラの狼的環境による結果をまつ迄もないことを教えている。

このようにこどもは既に母の胎内にいるときから、そのきずなが感覚によって刷り込まれ、母の声を聞き分けスキンシップによってつながり、生れてからは眼と眼によって接触し更に母乳をたしなむことによって基本的信頼が培われ、その印象が全生涯に及ぶとすれば、母の役割が想像以上に大きいことを知るのである。

従って幼児教育の第一歩は母親に対する教育であることに気づいた人がいる。それはフレーベルで一八三九年初めて母親の講習会を開き、保育者の使命はこどもよりも母親への教育であると主張したのである。

以上をまとめてみると、母親に対しては、母親とこどもが愛と依存から出発し、その愛情が本能的な感情と行為に走ることなく、神の前に敬虔な理性に富み、こどもの本質と個性を理解し、こどもが何を必要としているのか、何を求めているのかを見抜く眼と知恵をもち、自愛性、自主性、創造性を養わせることに努め、とくに模倣期にはよきモデルとなるため言動を慎しみ、責任をもって行動することであり、こどもの自我の芽生えに当っては冷静に観察し、深い思いやりをもって導くことが何よりも大切で、そのためにその母親を指導するよき保育者が何よりも必要だと思うのである。

最後に皆さんに紹介したいことは、神戸の頌栄学園にキリスト教保育を導入したハウ女史が、幼児に生きる保育者の卒業に当って贈ったことばで、それは第一に幼児の霊的生命の尊重、第二に知的より情操の涵養、最後に最高の保育技術の修得と結んでいることで、そこに女史の面目を窺い知ることが出来ると思う。

なおこの際つけ加えたいことは、このたびの旅行で、スイスの古都イベルドンを訪ねたときに知ったことであるが、この街には人間教育の発祥地であるというにふさわしい事実がある。それは先ず初めにルソーがエミールの出版によって当時の人達の眼を醒まし、激昂を買い、

パリを追われてイベルドンに身をひそめた事実があること更にペスタロッチがエミールの感化を受け、それが献身の導火線となって、このイベルドンに於て新教育を実践したこと、その学園が極盛に向っているとき、フランクフルトにいた二十八才のフレーベルが、恩師にすすめられて、このイベルドンのペスタロッチを訪問、二度目の訪問では滞在二ヵ月に及び、新教育の見学により夢を燃してドイツに帰りブランケンブルクでキンデルガルテンの名を思いついたのであり、奇しくもこの三大教育者が時代を異にしてイベルドンを往来し、夫れ夫れの夢を完成した事実を知り感慨深く、美しいヌンヤテル湖畔に立って、しばし瞑想に耽ったのであった。そのとき偶然すばらしい機会に遭遇した。それはペスタロッチが当時若かったフレーベルに書き送った手紙を読んだのである。それは保育者としての心構えを淳々と説いたもので、その最後の町で、Schweigen und Tun（沈黙と実践）ということばを書きしるし、教育者はただ黙々とその理想を実行に移すことで、それが大切な金科玉條であ．ことを述べ、かくしてこどもに内在する生命力をのばすことに傾倒すべきだと結んでいる。流石にすばらしい教育者の手紙だと思う。

終りにのぞみ年老いた私から遺言として一言、我国の幼児教育の第一線に立って活躍して居られる皆さんに送りたいことばは、これから多難な未来を背負って居るこども達に心豊かな、視野の広い、自然と愛に生きる平和なこどもとして育てて戴きたいことで、最近ある未来学者が「こんな科学万能の時代がつづくと、廿一世紀は哲学と宗教の時代になるだろう。そうでないとみんなが生きて行けなくなるのではないか」といったことは味うべきことばではなかろうか。どうか皆さん、一人一人のこどものいのちの意義を知らせるために、母とこどものきずなから始める母親への教育、心の豊かな、しかもお互いに共に生きる精神をもつこどもを育てる母親への指導が何よりも大切であることを力説して私の貧しい講演を終る。

（パルモア病院）